

知りたくない動機がある一人と知識の複雑な関係―

太田 雅子 (Masako Ota)

東洋大学

ダニエル・ウィリアムズは、「人は知識を求める」というアリストテレス『形而上学』の冒頭の一節を引き、真っ向から異議を唱える。ひとが知りうることは無限であり、その中から何を知るかを選ばざるを得ない。その際、ひとは必ずしも真である知識を求めるとは限らない。あることを知るコストが知らないでいることのコストより大きい場合、ひとはそのコストを避けるという「動機」のもとで無知のままであり続ける傾向があることをウィリアムズは指摘する。このような知識のあり方をウィリアムズは「動機ある無知 (motivated ignorance)」と呼ぶ。知識への探究心を強調するアリストテレスの主張とは逆に、ウィリアムズは「知識は危険なものである」とさえ言う。本発表では、まず「動機ある無知」が私たちの日常に深く食い込んでいる現状を認識するところから考察を始める。

例えば、年賀状と暑中見舞いくらいしか交流のない親戚から突然封書が届いているのを見つけたとする。私はその親戚の家で暮らしている祖父の体調が思わしくないことは知っており、もしかしたら祖父の死去の知らせではないかと察することができる。封筒を開けて文面を見るまでは、祖父が亡くなったと「知る」ことはできない。しかし私はそのことを知りたくはない。だからその封書を開封せず、封書入れの奥の方にしまい込む。このとき私は、封書を開封したときのコスト、つまり肉親の死という現実を突きつけられることの落胆や衝撃を回避して、封書を開封せず真実を知ることをペンディングする。これは、親戚からの封書を「あら久しぶり、このところ会っていないな」などと思いつついま忙しいからあとで開けて読もうと封書入れのなかにしまうという「真正の無知」とは異なっている。

また（こちらはのちに比較対象となる自己欺瞞の一例として挙げられたものだが）自分の夫が友人と深い関係にあることにうすうす勘付いている妻は、決定的な証拠を入手していない。妻は通勤の際に車でその友人の家の前を通るのが近道なのではあるが、不貞のことを気にするようになってからはわざと遠回りして友人の家を通らないようにする。万が一その家から夫が出てくるのを目撃したり、夫も仕事に行っているはずなのにその近くで偶然見かけるようなことがあれば、夫の不貞は彼女の心のなかでほぼ決定的なものになってしまうように思うからだ。これらの事例をウィリアムズは「個人的な動機の無知」と呼ぶ。

他方で、「社会的な動機の無知」も存在する。個人的な動機の無知が文字通り当人の個人的な事情にかかわるのに対し、社会的な動機は自分以外の事情にかかわる。こちらの無知はしばしば集団的な無知となり、政治的志向による歴史認識のバイアスや東日本大震災時の放射能汚染に対する風評被害、また新型コロナウイルスの対応としてのマスクやワクチンの可否など枚挙にいとまがなく、いまだ決着をみない状況である。

これらの状況は「自己欺瞞」を想起させる。しかしウィリアムズはあえてその伝統的

な問題提起から距離をとるためにあえて自己欺瞞という語を用いずに論じている。

そして重要な問題は、動機ある無知は果たして合理的であるか、すなわち、「自分の信じたくないことから目を背けるといふ目的を達成し得ているか」ということである。例えばニール・リーヴィらが自己欺瞞は「自分の信じたくないものは信じない」という非合理的な動機によるにも関わらずきわめて戦略的に行われることを指摘しているが、他方でホルトンやファンクハウザーらは、一見類似して見える「故意の (willfull) 無知」と自己欺瞞は異なるものであると述べている。ウィリアムズは従来の自己欺瞞の哲学的分析とは別の方法で、動機ある無知を「故意の無知」として自己欺瞞の中に位置づけることが可能であると述べており、そのアプローチが成功しているか否かは、信じたいことを信じるとはどういうことかを探るためのひとつの論点になるだろう。

さらに、ウィリアムズは言及していないが、ある種の無知が動機づけられたものであるならば、真実から目を背けること＝誤りを信じることの道徳的責任を帰することができるかもまた興味深い論点となりうる。意識的であれ無意識的であれ、しかるべき動機があって知るべき真実に対して無知を貫き、そのことによって良からぬ事態が起こるならば、無知であることは非難され、責任追及の対象となるように思われるが、もし動機ありの無知が個人の信念のうちにとどまり、世界に対して何の影響も及ぼさない場合、それでも無知は責任の対象になるだろうか。

本発表では、以上のようなアプローチのもとで動機ある無知が私たちにとってどのような存在であるかを明らかにすることを試みる。